

財団だより

多摩川

1991. 6 第50号



ベニシジミ(シジミチョウ科)
開張31mm。出現期4-5月、5-10月。翅はオレンジ色。食草スイバ。



釣りもオシャレに……。 (世田谷区 玉川)

■ 多摩川現風景 ■

(6) 釣り

奥多摩からカヌー下りをしていて視界の中に釣り人のいない風景にあうのはめったにない。厳冬期を除いてたいてい誰かに出会っている。その釣りのスタイルもいろいろで、多摩川は細長い釣り堀ではないかとさえ思える程、竿が並んでいる所もある。

中でも子供の道具類の立派さと豊富なことには驚くのだが、あまり詳しくは知らないようだ。それでも一人何本もの竿を立ててコイ釣りの投げ込みをしているのを見かける。多摩川には体長1mぐらいのコイがウヨウヨいるらしく、深みには何本もの糸が交差している。女性の釣り師にも今頃は良く出会う。しかし本格的な釣り師スタイルをなさっているから遠目には分らないが仕種は女性であるからしばらく見ていると気づく。

捨て針やテグス、エサ袋など無責任な釣り人の話しが時々新聞誌上に載ることが多くなったが、釣り人は多くなっても釣り方やマナーを教えあう関係がなくなったからかも知れない。

今年は6月16日がアユ漁の解禁日である。

● 関連する財団の助成研究 〈学術研究〉

- ①多摩川の環境と魚類の活動性に関する研究〔汚染指標としての活動力の測定〕 井上 実 1979 No.21
- ②多摩川水系における水生生物生産システムの解析と生産力のアセスメント〔多摩川水系のありうべき魚類の生産力〕 多紀保彦 1980 No.24
- ③多摩川水系魚類の餌料についての研究〔河川敷流水内における稚仔魚の初期餌料についての研究〕 杉浦 宏 1983 No.59
- ④多摩川水系における川漁の技法と習俗 安斉 忠雄 1983 No.63
- ⑤多摩川に生息する魚類の魚病相と再生産力に関する研究 日比谷 京 1984 No.72
- ⑥護岸が流れに及ぼす効果およびアユの生育場との関連について 玉井 信行 1988 No.113
- ⑦多摩川における魚類の生息環境と免疫学的研究 出口 吉昭 1989 No.120

〈一般研究〉

- ①多摩川水系の近世漁労関係史料の収集と考察〔特に秋川水系を中心として〕 宮田 満 1988 No.56
- ②水路式開放型浄化施設による多摩川水系の啓蒙と中流魚の増殖 日高 万典 1990 No.61

多摩川散歩

●大師橋から六郷橋にかけて

君塚芳輝

手元にある2冊の印刷物、『大田区の水生生物』の報告書本冊と、区で児童・生徒向けに平易に再編纂した同名のパンフレットを開くと、書面からも豊かな自然の香りが伝わってくる。

大師橋から六郷橋にかけての多摩川下流域は、東京湾に注ぐ隅田川、荒川、江戸川の下流域と比べても、最も自然度の高い水環境である。先に上げた報告書と、標本のある都環境保全局の調査結果等を併せると、河口を含む多摩川下流域からは65種類もの魚類が採集されている。このうち明らかな移殖種は6種類に過ぎず、ナンヨウボラ、サツキハゼの2種は現在の世界の北限記録とされているなど、魚類相の質も高い。

多摩川の下流域が都内の他水系と最も異なる点は、付近での低水護岸—水と陸が接する部分の護岸—の施工率が低く、干潟やヨシ原といった下流特有の生態系が残されていることがあげられる。都内の他の水系の下流域では、生態的に重要な低水部がコンクリートで固められた結果、出現する魚類相が極端に単純化(江戸川・荒川)、あるいは常住種が皆無(隅田川)といった著しい差異を生じているのである。一方で、単純な水質(BOD)の面ではいずれも多摩川と差が無い事実があり、河川構造がいかに生物生息に影響を与えているかを明確に示す結果となっている。

さて、この豊かな多摩川下流域の自然を実際に歩いてみよう。京浜急行大師線の産業道路駅で下車、産業道路を東京方向に進んで大師橋に至る。この橋の川崎側下流(右岸)の水辺に出ると、干潮時には河口に向かって豊かな干潟が発達する。季節によっては広大なカニ類の集落も観察され、中洲周辺には汽水性のヤマトシジミも生息する。釣り餌用のゴカイ類も多く、「えむし」の名称で漁業権が設定されている。対岸の羽田空港や、マンション群の存在と強烈な対比を示す景観である。

上流の六郷橋にかけては、大師橋を渡って左岸側を遡る。この区間には、豊かな抽水植物の群落(ヨシ原)が発達、干潮時にはその間に細流も形成される。六郷橋との中間の中洲周辺では、汽水性の稀少種ヒヌマイトノボの生息も報じられている。豊かなヨシ原は、魚、鳥、昆虫などの生息環境として重要であるばかりでなく、河川の自浄作用にも大きく貢献している。この付近の風景を目の当たりにすると、下流でBODを下降させる顕著な多摩川の自浄作用が、改めて実感できよう。

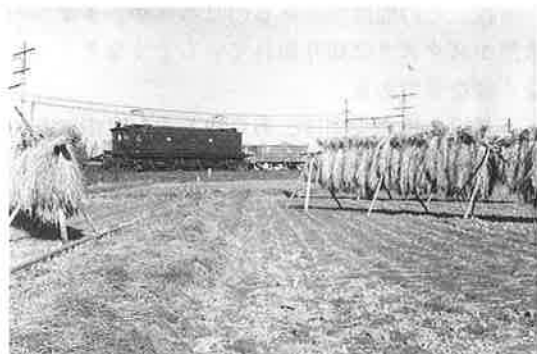
六郷橋のすぐ上流、京浜急行本線の鉄橋下流側直下には、土の素掘り(土羽)の用水路がある。かつての都市下水路と思われるが、現在は短い暗渠で多摩川本流と繋がっている。この付近は感潮域といって、潮の干満によって水位が変動する水域なので、水路内にも水の動きがある。この水路では、本流の出現数8に対して16種類もの魚類を記録した。本流との自由往来、つまり生物学的水循環が確保され、かつ緩傾斜の土羽の低水線で柔らかないすみ場所を提供したことが、魚にとっての快適環境を二次的に創出したのであろう。そして水辺の環境指標種の一つであるミズガキ(水辺で遊ぶ地元の子供)の周年的発生は、人間にとっても優良な親水場所である証拠だ。地元の大田区役所が人工的な公園整備を排し、コース設定と案内板の設置のみに徹した姿勢も高く評価できる。

大師橋から六郷橋にかけての干潟、ヨシ原、生物学的水循環の保全された土羽の廃用水路は、いずれも未整備であることが、生物に評価されている結果となっている。生息環境としての評価が、人間の視点と生物とではかなり異なることに思いを馳せながら、この区間で知的散策を楽しんで戴くことをお勧めしておこう。



私と多摩川

●鉄道の除草と環境保護



稲城に行く貨物列車(南武線稲城長沼付近・昭和46年頃)

長倉光孝

水源から河口まで123 kmあるという多摩川に沿って75kmの間を青梅線と南武線が結ぶ。奥多摩の日原から産出される石灰石を、主に川崎の日本鋼管へ運ぶ専用貨物列車は、35トン積みのホッパ車16両編成、1日に8往復の直通運転をしている。始発の奥多摩駅と終着の浜川崎駅の標高差は、およそ340m。以前その列車を運転していた私は、沿線の色々なものを見たり聞いたりする機会に恵まれていた。その中でも稲城長沼から登戸あたりの事には、家が近いせいもあり特に興味深かった。

府中から多摩川を渡り、S字カーブを過ぎると、そこには果樹園や水田が広がり、稲城穀倉地帯とも名付けたくなる様な景観を呈していた。有名な多摩川梨の産地である。しかし、水田に稲が育ち始める頃には線路の雑草もすくすく伸び始める。頑丈で旺盛な生命力なので困りものである。雨の夜などは、ヘッドライトに照らされて光ったレールの間に、床下のモーターや台車になぎ倒され、頭を均一の高さに揃えられ、あたかも緑色の絨毯を引き詰めた様に映る事もあり、意外に綺麗なものだと思ったりもした。否、感心しては居られない。線路内の標識を覆い隠す程にまで伸びられては支障を来すのである。

保線の担当は除草剤を撒(播)いていたのだが、

それは環境保護に対して、非常に神経を遣う作業である事を後になって知った。南多摩で大丸用水、稲田堤で二ヶ領用水が、それぞれ多摩川より堰入れられ、それらが網の目の様な水路を展開し、田植えの頃には小さな水路にも滔々と流れ込む様は、見ているだけでも清々しい。田畑を潤す大切な役目を終えた水は、再び母なる多摩川へと帰って行くのである。南武線は、大きなもので巾3m位、小さなものでは30cm程の水路を数十回も跨いでいる。以前の撒水車での水溶性の薬剤撒布では、用水路に薬剤が流入しない様に、水路を跨ぐ部分や農地と並行する区間ではコックを閉じる。その他民家に隣接している箇所も同様の扱いをしていた。すなわち、規制を受ける区間が殆どであったが、昭和60年頃に、沿線のぶどうの果樹が枯れるという事があり、はるばる山梨県から苗木を取り寄せて、弁償した苦い経験もあったと聞く。

それ以後はレールの間に粒状の薬剤を手播きする作業だけにしたが、それも殆どが規制区間である為、業者の手も借りて年2回程度の草刈機や鎌で刈る手作業が主になっている。南武線に限らず、春から秋にかけて雑草が生い茂り、害虫が発生したり、背が伸びて見通しを悪くする。中には、刈っても再生力の強い厄介な種類もある。そうかと言って、強力な薬剤撒布を続けていたら土壤汚染や、地下水への影響が出ていたかも知れない。

除草は列車の安全運行には欠かせない作業であるが、稲や野菜・果樹を育てる農業の育成も大切な事である。沿線住民の健康的な生活も然りである。結果として、地域との共存、沿線の環境保護を優先に考えた健全な方法を採用している。

国鉄からJRとなって、大抵の線区では新しいカラフルな車両が走っている。しかし、その足元である線路を保守する人達にとって、少ない人員、決った予算の中で、多くの人手に頼るしかない除草は悩みの種である。

(狛江市在住)

よみがえ

甦れ！多摩川

多摩川紀行

⑨羽村堰～拝島橋(7.5km)

山道省三

夏日を思わせるような好天に恵まれた5月26日の日曜日。羽村堰の下では子供たちが裸になって泳いでいた。正午の気温が川原の表面で32℃、水温17.5℃。水に入ると冷たいと感じるのだが子供たちは平気で遊んでいる。堰下の川原は、かんがい期のためか堰からの放流があって水が流れ、ちょうど良い遊び場であり、釣り、バーベキュー、ボート遊び、水遊びと楽しそうである。

羽村堰の下には人道橋である羽村町堰下橋と人車共用の羽村大橋があり、その間2ヶ所の堰がある。下流を眺めると水面が広く流れもあって、充分カヌーで下れそうである。12時40分、バーベキューパーティを横目に出発した。

上流から見た広い水面もいざ近づいてみると深さ20～30cm程度の瀬が多く、カヌーは底をこすりながら下っていく。

羽村大橋から拝島橋の間にかけては、水は少ないものの広い川原にヨシ原やニセアカシアの林が広がり、後背の段丘崖の緑地と合わさって豊かな自然を感じさせる。多摩川の中流部の代表的な景観ともいえよう。むろんこの時期だから野鳥の姿や声も多く愛好家にとっては絶好の観察フィールドでもある。ところが、この野鳥の声にまじって、時々削岩機のような音が聞こえ出したのは秋川との合流点あたりだった。何の音かはすぐ分った。土煙りをあげ、時々ヘルメットが草むらの中から飛び出しているのが水面からも見えるのだ。モトクロスをやっている連中が、広い草原の中にコースをつくり、すさまじい爆音を響かせながら走り廻っている。所々の水際にはどこから入ってきたのかバイクを運ぶための車体を高くした四輪駆動の小型トラックが顔をつき出している。川岸に立ってのぞいてもどこにどうコースが造られているのかわからない。むろん中に入るなど、どこからバイクが飛んで来るかわからないから恐くて近寄れない。それにしてもこの騒々しさは何だろう。若い人に言わせると年を取った証拠だそうだが、誰が見たってこの場には全くそぐわない。しかも秋川の合

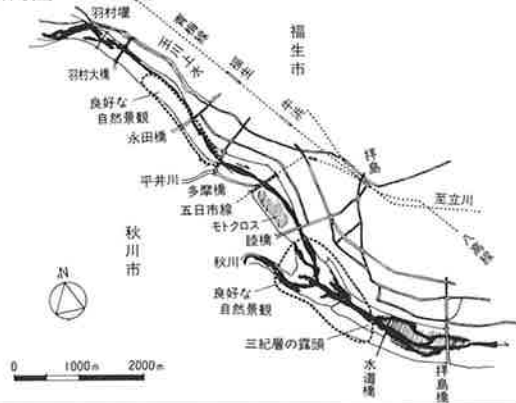
流点から拝島にかけての右岸の何ヶ所かが占拠されている。ひどいになると水際を走っている。彼らにしてみれば普通の人と近寄れない地形の悪い所程、その醍醐味があるのだろうが、多摩川の自然がズタズタに切り裂れているようなとてつもなく嫌な音である。

多摩川の持つ空間は、あらゆる人が自由に利用できるのであるが、それは多摩川が多摩川らしい空間を公平に享受できるという前提のもとに成り立つはずで、野鳥を追い出し、草木を踏みにじり身の危険すら覚えさせるこの種の遊びは、たとえ取り締る規則がなくても、川の中には持ち込んで欲しくない。

昨年のゴールデンウィークには、多摩川本川だけで100万人の人出があったとされる。おそらく今後も多摩川を訪れる人は季節に関係なく増え続けることが予想されるなら、そろそろ多摩川独自の利用のルールづくりを管理者と利用者間で推めてはどうだろう。

夕刻、拝島橋にやっと辿りついたら、50がらみの男の人がパンツひとつになって川底の岩を夢中で探っていた。カヌーをかたづけながらそれとなく見ていたら、誰にともなく「ウナギがいたぞ」と叫んだ。むろん素手でウナギを獲れるはずもなく、しばらくしてあきらめたのか私のいる岸に다가ってきて、「私は素手で魚を獲ることをモットーとしているが、3年程前少し下流の岩場で二の腕程のウナギを獲った」と熱っぽく語ってくれた。彼のビックには小さなフナが一匹入っていただけだったが、これこそ多摩川にふさわしい光景だと急に親しみを感じた。

案内図



財団からのお知らせ

《多摩川およびその流域の環境浄化に》 《関する調査・試験研究募集—第二次—》

平成3年度第一次研究助成選考結果は下記のとおりです。学術研究6件、一般研究4件が選考されました。

本年度継続研究を含めても、本年度助成金枠に余裕がありますので、第2次募集を致します。応募についての詳細は財団事務局までご連絡下さい。

公募締切日 平成3年7月31日

問い合わせ先 〒150 東京都渋谷区渋谷1-16-14 (渋谷地下鉄ビル内)

電話 (03) 3400-9142 (財)とうきゅう環境浄化財団

〈第一次研究助成選考結果〉

研 究 課 題	代表研究者	所 属
(A類研究)		
●多摩川中流域における流域環境の評価と将来予測に関する調査研究	武 内 和 彦	東京大学農学部助教授
●多摩川水系の地表水と地下水の交流に関する研究	榎 根 勇	筑波大学地球科学系教授
●多摩川流域に生息する野生ニホンザルの生息実態調査	和 秀 雄	日本獣医畜産大学教授
●多摩川の音を測る	北 村 眞 一	山梨大学工学部土木環境工学科助教授
●多摩川河川敷の固有植物群落構成種の生活史と存続に関する研究	井 上 健	信州大学教養部助教授
●衛星データと地理情報システムを用いた多摩川流域およびその周辺における鳥類繁殖分布状態の変化と環境変動との相互関係解析	金 井 裕	(財)日本野鳥の会研究センター主任研究員
(B類研究)		
●絵画にあらわれた河川景観の変遷 ——多摩川を主として——	岡 村 直 樹	フリーライター
●多摩地区におけるカンアオイ類の分布、生態と保護・育成に関する研究	小 泉 武 栄	東京学芸大学教育学部助教授
●多摩川水系のムカシトンボの分布と生態	大 森 武 昭	元、江東区立南砂中学校教諭
●多摩川水源山村地域における冷水資源の利用 ——山葵栽培——	上 野 福 男	元、駒沢大学文学部教授

多摩川流域の自然環境に関する催物一覧

日 時	場 所	行 事 名	主催者名・連絡先・(電話)
6月5日(水) 12:30~16:00	砧公園~静嘉堂~岡本民家園	環境週間に 谷戸川を歩こう	世田谷区生活環境部環境公害課 (03-3412-1111 内線2386)
6月16日(日) 9:30~15:00	青梅万年橋~下奥多摩橋 (JR青梅線青梅駅改札口集合)	多摩川の自然を守る会 自然観察会	多摩川の自然を守る会 (0426-36-0902 柴田隆行)
6月16日(日) 9:00~	有吉橋~丸子橋~等々力緑地~平瀬川 (ガス橋の川崎側集合)	水ぬるむ多摩川の流れ —多摩川の川っぶちを歩く—	多摩川を愛する会 (044-411-7001 萩坂 昇)
7月13日(土)~ 14日(日)	笠取山 (集合時間、場所は未定)	多摩川の源流を訪ねる	同 上
6月29日(土) 13:00~15:30	せたがやトラスト協会事務局・会議室	第1回 「庭先の緑化」講習会	(財)せたがやトラスト協会 (03-3708-7311 担当小出)
6月1日(土)~ 9月30日(月)	せたがやトラスト協会	せたがやウォッチング —見つけて下さい、世田谷らしき 図画・写真・作文コンクール—	同 上
7月26日(金) 19:00~21:00	二子玉川緑化運動場	第16回 ラブリバー たまがわ花火大会	世田谷区、多摩川を愛する会共催 (多摩川を愛する会事務局 03-3464-6791 泉)

※参加方法等詳細は直接主催者にお問い合わせ下さい。

(到着順)

多摩川'91の発刊について

多摩川'91のテーマは、“多摩川の新たな貌をめざして”と題して、次の世代に多摩川をどう引き継いでいくのか、その水、空間、利用のあり方を3回程続けて探してみたいと考えています。

今年はその1として、「多摩川と都市化の構造」として編集しました。

<総集編>

高密度化した都市の中における多摩川と都市との

関係を、その空間構造の変化、水文の変遷、自然空間としての生態的意味、利用の現況等についてまとめてみました。

<資料編>

多摩川の水利用、水文的資料、空間利用等についての資料を収録しました。

ご希望の方は財団事務局までご連絡下さい。

- 発行日 平成3年6月1日
- 編集兼発行 (財)とうきゅう環境浄化財団
〒150 渋谷区渋谷1-16-14
(渋谷地下鉄ビル内)
TEL (03)3400-9142
FAX (03)3400-9141

